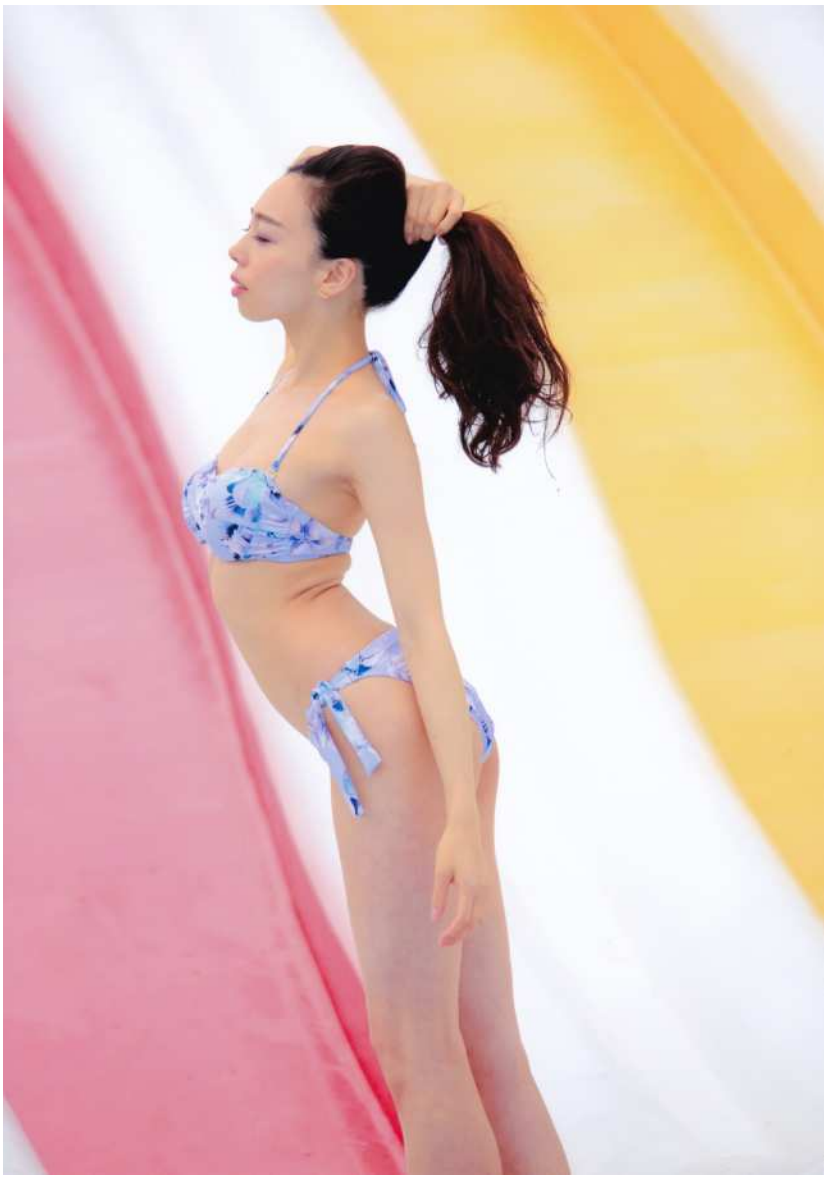
全東京写真連盟
撮影会写真コンクール

入賞作品集

審査対象 全東京写真連盟水着モデル撮影会
撮影日 2019 年6 月9 日

審査日 2019年8月11日
審査員：HARUKI先生



金　賞
「予感」
中牟田 剛 様
モデル 茅原田 真衣

審査員：HARUKI先生　講 評

大胆かつシンプルなグラフィカルな仕上がりの作品です。60-600mmの超望遠ズームな中から焦点距離400mmを使用して遠くのモデルを捉えたことで望遠特有の圧縮効果も手伝って、本来の生体であるはずのモデルさんを無機的なマネキンみたいなオブジェ化して３色の背景とセットのように見せるという、かなり計算しつくされた上等テクニックが効いたとてもユニークな表現手法です。
欲を言えば足元まで映っていて、もう少し左位置から撮影してモデルさんの胸や脚のラインが背景のピンクからもう若干でも離れていれば金賞では無くプラチナ賞でした（笑）。

銀　賞
「スプリンクラー」
横山 伸夫 様
モデル 吉村 もか

審査員：HARUKI先生　講 評

モデルさんの笑顔が良いですネ！！とにかく明るく良い表情です。セクシーな水着での笑顔という組合せが可愛さを増しました。「スプリンクラー」っていうタイトルはともかく水流が円を描くタイミングも決まっています。
惜しむらくは画面構成の中でモデルさんの顔を中心にしてしまったことで単調な仕上がりになってしまいました。レンズのフリがもう少し画面下向きで膝辺りまで入るフレーミングであればもっと上位を狙えただろうと思います。

銅　賞
「オリエンタルガール」
中山 昌幸 様
モデル 栞 子

審査員：HARUKI先生　講 評

作者が迷い込んでしまった森の奥深くの小径でふと出会ったような雰囲気が出ており、モデルさんの無表情に近い感じも自然な印象となっています。ポッコリお腹が幼さを感じさせる年齢不詳なオリエンタルガールさんの持つやや不思議な存在感がこの作品の突破口となったような気がします。ストロボ光を使うと不自然に見える場合が多いの通常は敬遠がちですが、この場合には日中シンクロで背景よりも１段くらい多めの光を当てることで後方の緑を深く落として見せるなどの表現も面白いかも知れないですね☆

入　選
「まなざし」
生田 文夫 様
モデル 栞 子

入　選
「秘密のsexy」
芝本 勲 様
モデル 吉村 もか

入　選
「しゃぼん玉」
堤 博史 様
モデル め る

入　選
「もかちゃん」
日向野 遼平 様
モデル 吉村 もか

入　選
「あこがれのスレンダー・ガール」
星野 祐一 様
モデル 吉村 もか

佳　作
「見つめる」
新井 潔 様
モデル め る

佳　作
「夏のアール」
石川 玲 様
モデル 星邨 雪乃

佳　作
「さわやか」
鵜飼 典彦 様
モデル 吉村 もか

佳　作
「柔らかに」
小幡 大輔 様
モデル 南 りこ

佳　作
「姫を撮る」
木下 仁志 様
モデル 茅原田 真衣

佳　作
「夏・満喫」
菅原 道久 様
モデル 茅原田 真衣

佳　作
「時の止まった世界で」
髙橋 壯太 様
モデル 栞 子

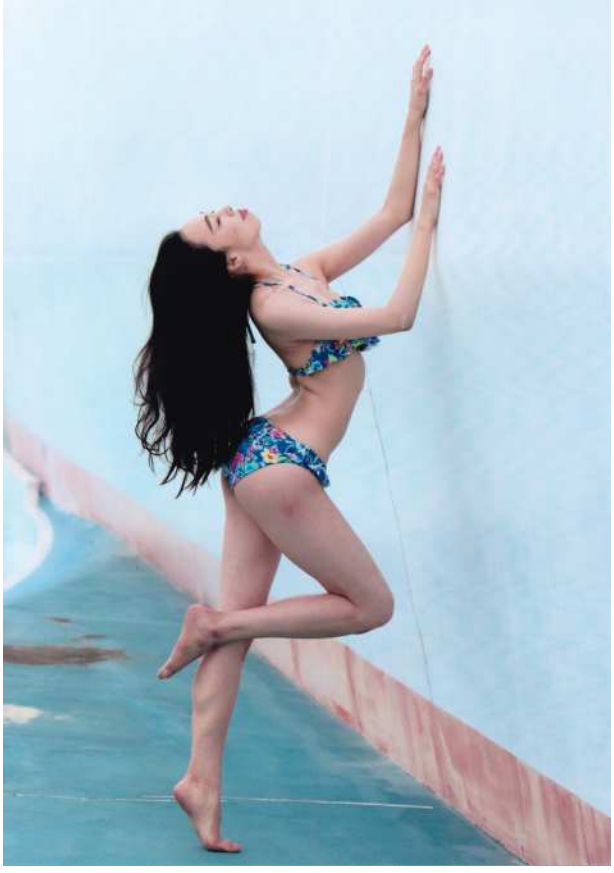
佳　作
「視線」
田沼 靖信 様
モデル 吉村 もか

佳　作
「振り向いて」
豊田 光司 様
モデル 敦賀 あいり

佳　作
「レインボー・サボン」
前田 佳宏 様
モデル 吉村 もか

次　点
「銀朱（ぎんしゅ）」
岩本 雄三 様
モデル 安桜 はるな

次　点
「少女の肖像」
小倉 良二 様
モデル 栞 子



次　点
「オリジナルポーズ」
斉藤 貴生 様
モデル 茅原田 真衣

次　点
「シャボン玉に魅せられて」
滝本 憲一郎 様
モデル 吉村 もか

次　点
「誘惑のまなざし」
寺島 弘行 様
モデル Aya

次　点
「お茶目な君」
中山 静男 様
モデル 夏山 りか

次　点
「しぶきを浴びて」
深野 武雄 様
モデル 茅原田 真衣

次　点
「冷い！」
藤原 隆志 様
モデル 吉村 もか

次　点
「気まぐれシンコペーション」
門間 正之 様
モデル 栞 子

次　点
「たわむれ」
湯原 章綱 様
モデル 吉村 もか

■　総評

ふたつの撮影会を通して感じたのは新人モデルさんが加わったことで活性化したのでしょうか、応募作品を拝見した印象として以前よりも個性が光る作品が多くなったような気がします。素晴らしい事ですね！！

気になったこととしては、せっかくの良い写真が撮れても、ありがちのタイトルだったりベタだったりすると悲しくなります。といっても妙に気取ったりする必要はないのです。もう少しタイトルにも気を使ってもらえたら良いかなーって思います。
もっとも大事なのは写真そのものである事は言うまでも無いのですが、その次にタイトルも重要な要素です。コンテストなど人に見てもらう場合には、“写真”“と”“タイトル”が融合してはじめて「作品」として伝わるものだという思いを意識していただければ幸いです。

2019年8月18日　　ＨＡＲＵＫＩ